

小学校外国語活動における形成的評価の研究 — ふり返しカードを活用して—

小山内 早苗 弘前市立北小学校

要旨

本研究は、平成23年度から全面実施される小学校外国語活動(以下外国語活動と略す)で教材として取り扱う「英語ノート」(現在移行措置期間)での実践を基に、ふり返しカードを活用した形成的評価が、児童の学習活動にどのような変容をもたらすかを明らかにするために行ったものである。外国語活動の評価については、未だ十分内容や方法が検討されていないため、各校独自に行っている現状であり、評価方法やその内容等について迷っている学校も少なくない。

本研究では新学習指導要領外国語活動の目標に基づいて評価規準を設定し、そこから各単元毎に児童の自己評価のための「ふり返しカード」を作成した。そしてこのふり返しカードを活用して、コミュニケーション能力の素地を育成する外国語活動のより望ましい指導と評価の方向を考察した。アンケート調査の結果及びふり返しカードの記入内容の分析から、ふり返しカードの活用は情意面では効果が示されたものの、認知面では不安感を解消しきれない児童の存在が課題として残った。

【キーワード】 小学校外国語活動 英語ノート コミュニケーション能力の素地
ふり返しカード 形成的評価

1 はじめに

これまで英語活動は、「総合的な学習の時間」において、国際理解教育の中に位置づけられて実施されてきた。平成19年度の文部科学省による調査結果では、全国の公立小学校で英語活動は、全体の97%以上で実施されている。しかし、実施の内訳を見た場合、特区として英語を教科で行っている小学校、週1時間程度を独自のカリキュラムで実施している小学校、年間数時間程度をALT主導で行っている小学校というように、その内容と方法、質的な部分において大きな差が出てきた。同中学校区にあって実施に大きな差がある場合、中学校から始まる「英語」という教科学習に支障が出始めていること、教育の機会均等をめざす教育基本法の理念に違っていることから、英語活動を見直す必要が出てきた。外国語活動導入の基本理念と、現代の児童の課題については以下の通りである。

「外国語活動導入の基本理念としては、小学生の柔軟な適応力を生かすこと、グローバル化の進展への対応、教育の機会均等の確保の3点が挙げられている。小学生の柔軟な適応力は、コミュニケーション能力の素地を育む上で特に重要である。また、現代の児童には他者を理解し、自分を表現し、社会と対話するための言語によるコミュニケーション能力を育成することが課題となっている。異文化を理解し、我が国の文化を発信する力を育てる視点をもつことも重要であるということから小学校外国語活動が導入された。」(1)

このことから平成23年度実施の新学習指導要領において、全国の小学校5・6年生が「外国語活動」という領域で、年間35時間外国語(主として英語)を学習することとなった。今までは各小学校に任せておいたカリキュラムは、「中学校英語の前倒しにならない」「スキル中心の学習にならない」等の指針に合わせて再編成の必要が出てきた。この課題解決のために作られたのが「英語ノート」である。この英語ノートは教科書ではないため使用義務はないが、新学習指導要領下での「外国語活動」を具現化するものとして作られている。

「英語ノート」の特長として、歌やチャンツ、活動例が多く挙げられている。

現行の学習指導要領から目標準拠評価(絶対評価)が行われ、それに伴って観点別学習状況が提案されている。外国語活動の評価に関しては、「児童生徒の学習評価の在り方に関するワーキンググループ」が評価の方向を示唆しているが、現段階ではその具体策は出されていない。そのため、本研究では自校設定の評価規準を活用して実践し、考察を進めた。

現行学習指導要領並びに新学習指導要領での目標準拠評価は、児童が目標に到達できなかった場合、指導改善を図ることが評価と指導の一体化という視点から重要とされている。外国語活動は領域であるが、従来の評価の観点を使って、以下のように整合させてみた。

表1 評価観点と指導内容

評価観点	指導内容	学習成果の期待期間
関心・意欲・態度	積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度	長期間の学習を要する
思考・判断	言語や文化についての体験的な理解	短期間である程度の成果あり
知識・理解、技能・表現	外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ	短期間である程度の成果あり

表1は、評価観点と指導内容の関連、及び学習成果の期待期間の相関性についてまとめたものである。量的な部分での評価が困難であることから、評価は、質的な部分での変容、「態度」「理解」などの点を具体的に表記することが重要である。目標準拠評価であることから、集団における相対評価とは異なり、評価指標が主観性や恣意性に委ねられることも鑑みた上で、複数の評価手段や方法で、望ましい実践を行っていく。

形成的評価は、一般的には以下のように捉えられている。

「形成的評価とは、教育活動の途中において目標がどのように達成されつつあるかを中間的に把握し、指導計画および指導の改善を図るために行われる評価のことである。

形成的評価に対する認識が強くなったのは、ブルームらの教授活動や学習活動が行われた後でそれらの有効性について把握する総括的評価と形成的評価とを区別すべきであるという考えや、形成的評価に関連して形成的テストという新しい方法や完全習得学習(マスタリー・ラーニング)のための授業システムが紹介されたことによるところが大きい。」(2)。

以上のように形成的評価は、授業改善に役立つ評価活動である。学習のスマールステップを支え、学習活動を活性化し、次の指導に役立つ評価である。外国語活動という領域で、最適な評価であると判断し適用した。本研究は1時間の学習後に行っているふり返りカードの自己評価を主に児童の変容を考察した。ここから、本研究の理論について進めていく。

2 研究の目的と方法

2-1 研究の目的

学習目標に対する到達度を児童生徒がそれぞれ評価することを「自己(到達度)評価」と言い、その評価活動を「形成的」に行う評価方法(「形成的評価」)は動機づけを高めるうえで効果的であるとされてきた。しかし、教科学習のように「知識習得学習」では効果的であると効果が認められてきた研究と違い、外国語活動は実践研究の結果が明らかになっていない。

本研究では、形成的評価が外国語活動の学習にどのような変容をもたらすかを明らかにすることを目的とする。担当学級第5学年1学級のみを抽出し、分析考察していく。発表観察、行動観察、英語ノート記述内容調査、児童座席チェックシート(後述参考資料 p.11 参照)等の評価方法に加え、ふり返りカードを使って形成的評価を実際に行っているが、児童のふり返りカードに焦点を絞って研究を進めていく。ふり返りカードの集計からインタビューも必要に応じて取り入れ、理由追求のため付け加えていく。教師がコメントを書き込むなどフィードバック作業を意図的に組み入れた実践からどのような変容が見られ、望ましい実践にするためには、結果をどのように今後授業に反映したらよいかを考えた。

2-2 研究の方法

2-2-1 コミュニケーション能力の素地について

「コミュニケーション能力の素地」とはどのようなことを表すのかを確認する。内層から表層への段階的な進化として想定した。その具体は、「コミュニケーションへの意欲」「コミュニケーションへの挑戦」「コミュニケーションへの自信」の3層である。言語以外の要素としては、「ジェスチャーなどを含んだノンバーバル(非言語)コミュニケーション」「知り得た言葉を駆使するバーバル(言語)コミュニケーション」の2要素が重要要素である。この2つの観点を図示すると、以下のような「コミュニケーション能力の素地」となる。

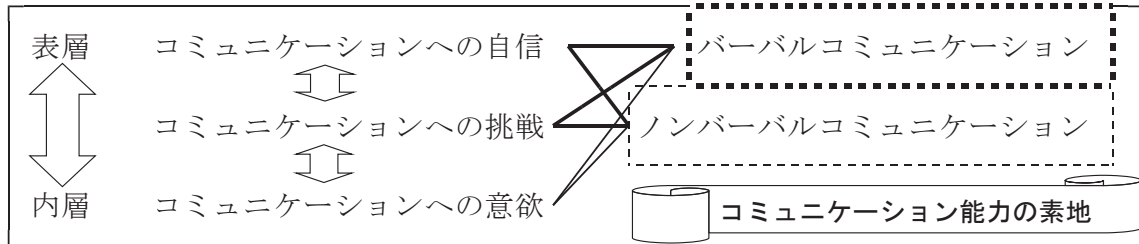


図1 コミュニケーション能力の素地

図1は、コミュニケーション能力が、言語に関わる部分と非言語に関わる両方の部分に関わって育成されていくことを表している。学習の積み重ねと、内層から表層への繰り返しで、コミュニケーション能力の素地がスパイラルに育成されていく。

2-2-2 形成的評価のプロセスについて

形成的評価のプロセスを以下のように捉え実践した。診断的評価・形成的評価・総括的評価をスパイラルに組み合わせて学習活動全体を評価していくが、指導過程において繰り返し行われる形成的評価は、児童の意欲喚起と授業改善をめざし行われる。また、児童と教師のコミュニケーション活動としても位置付けられる。

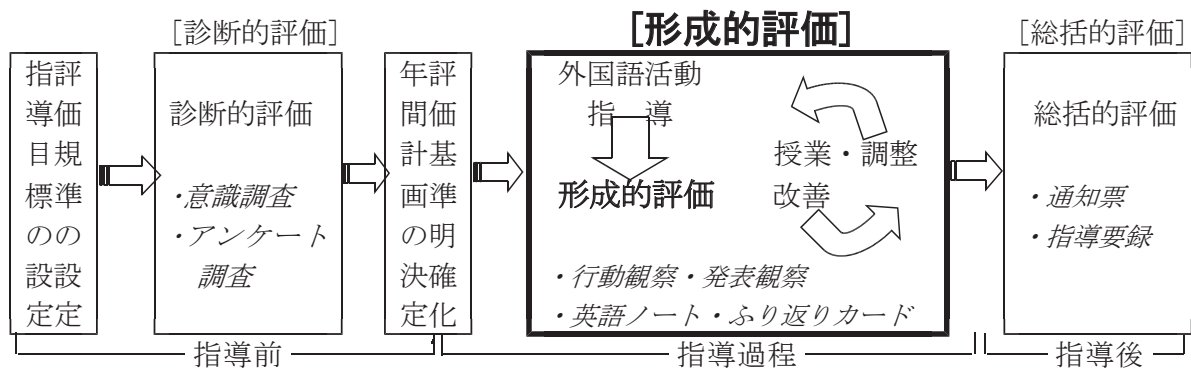


図2 形成的評価のプロセス

図2は、診断的評価から形成的評価、総括的評価へのプロセスを表している。今回取り上げる「形成的評価」は、幾つかの評価方法を組み合わせて行っている。児童は到達度指標の自己評価から学習の見直しの機会が与えられ、さらに指導者からのフィードバックがあり学習意欲と理解が広がる。ここで、ふり返りカードからの形成的評価を焦点化して見る。

2-2-3 ふり返りカードについて

これまで集団に準拠した評価は、集団の平均値を基準にした相対的評価が多く行われて

きた。しかし、学習意欲を高め、自己形成能力を育てるために、目標準拠評価が行われるようになった。学習の結果についての評価だけではなく、学習過程においても評価を実施し、指導の改善に活かしていく「指導と評価の一体化」が重要視されるようになってきた。積極的な評価活動は、児童の自己評価力を高め学習の活性化も促すと考える。本研究では、評価規準に即した観点別学習状況の評価観点を使い、声量等の態度面は割愛して進める。

ふり回りカードの内容は、声量やジェスチャー等の態度面に重点を置くふり回りも他校の実践例としては見られるが、学習内容に重点を置いたふり回りが、学習者としての学びの発達をより促すと考えることから、単元の評価規準をもとに作成した。以下は「英語ノート1」Lesson 7の評価規準である。

表2 観点別学習状況の評価規準

活動目標内容	到達目標	観点別学習状況の評価規準			
		関心・意欲・態度	言語や文化に対する体験的な理解	コミュニケーションを図ろうとする態度	音声や表現への慣れ親しみ
これは何か	・英語と日本語との違いを通して、漢字の成り立ちの面白さに気付く。	言語によって、言葉そのものが違うだけでなく、ものに対する考えが違うことに気付く。	漢字の読み方を考える活動を通して、漢字の成り立ちの面白さに気付く。		
これはですか	・What's this?という質問を理解し、答える。	Yes, please./ Up/Down/Right/Left,please.等を考えて言う。		前にいる児童に質問したり、ブラックボックスの中の物を予想して答えたりしようとする。	
クイズを作ろう	・What's this?を使って尋ねるクイズを作る。	クイズ大会でどのようなクイズを出すかを話し合う。			シルエット・クイズを作って、それが何か尋ねる。
クイズをイシズよ大会	・What's this?を使って尋ねるクイズを作り、互いに尋ねたり答えたりしながらクイズ大会をする。	今まで学習したことを活用して、積極的にクイズ大会を行う。		What's this?という表現を使い、相手に質問する。	

表2は、指導資料に準拠して作った評価規準である。年間計画作成後、単元全体での評価規準を設定し、この評価規準に合わせて Lesson 毎にふり回りカードを作成し、自己評価をさせた。ふり回りカードの視点は、「言語や文化に対する体験的な理解」「コミュニケーションを図ろうとする態度」「音声や表現への慣れ親しみ」の3観点を具体的な学習活動にして提示した。


<div style="border: 2px dashed black; padding: 5px; display: inline-block;"> ふり回りカード </div>	○年○組○番 名前【 】	【学習のめあて】 ☆言葉や文化について理解を深めよう ☆積極的にコミュニケーションを図ろう ☆外国語の音声や表現に親しもう			
自己評価 ◎ ○ △					
LESSON 7		11/19	11/26	12/3	12/10
日本語とのちがいを知り、言葉の面白さに気づいた。					
積極的に友達や先生と英語で話したり歌やゲームを楽しんだりした。					
世界のいろいろな文字や英語の音声・言い方に慣れ親しんだ。					
～『クイズ大会をしよう』を学習して～					
感想 -----					

図3 ふり回りカードの実例

【ふり返りカードについて】

- ・毎時間学習後に児童自身が記入。
- ・自己評価は、とてもよい◎、よい○、がんばろう△の3段階評価。
- ・感想は自由記述。学習内容や活動、ALT・JTE 関連、今後の希望等有。
- ・毎回回収して確認。助言、励まし等を記入し後返却。
- ・自己評価カードの蓄積をポートフォリオに移行。

3 結果と考察

3-1 診断的評価から

表3は5月に事前調査として実施したアンケートの結果を示したものである。

表3 外国語活動に関する児童アンケートの結果

項 目	◎	○	△	×
1 英語の授業は楽しいですか。	51.3%	46.2%	2.5%	0%
2 英語をよく聞いていますか。	43.6%	46.2%	10.2%	0%
3 英語で先生や友達に進んで話しかけますか。	12.8%	28.2%	38.5%	20.5%
4 ゲーム、会話の練習に進んで参加していますか。	46.2%	41.0%	12.8%	0%
5 家の人に英語で学習したことを話しますか。	53.9%	28.2%	12.8%	5.1%
6 学習した英語を家で使ったことはありますか。	7.7%	25.6%	48.7%	18.0%
7 英語は簡単だと思いますか。	12.8%	61.5%	23.1%	2.6%
8 次の英語の授業を楽しみにしていますか。	56.4%	33.3%	7.7%	2.6%

注) ◎=とてもそうである ○=まあまあそうである △=あまりそうでない
×=そうでない

この結果から、「進んで話すことに関しては消極的」「英語は簡単だと思っている」「外国語活動に関して家庭で話題にしている」ことが特長としてあげられる。家庭で話題にしている内容について追ってインタビューしたところ、「とても楽しかったこと」「なかなかうまくできなかったこと」の両極について取り上げられていることが分かった。また、学級通信等から情報を得た保護者が児童に対してその内容を問うている場合もあり、家庭内での親子のコミュニケーション活動が普段から比較的活発だということも分かった。

5月の時点で、英語に抵抗感があった児童の中には、9月の調査の時点でも抵抗感が残っている。ふり返りカードを見ると、「少し慣れてきた」「好きになってきた」という感想を書いていたが、人との関わりを苦手としている児童の中には、コミュニケーション活動を「恥ずかしい」、また、「英語の言い方を覚えるのは大変」というような感想も見られた。

3-2 アンケートの結果から

右の図4のグラフは、ふり返りカードの3段階の自己評価の推移を表したものである。ふり返りカードは、Lesson 毎に評価規準に即して作り、毎時間の授業後に、◎○△の印と記述で児童自身が行ってきた。この図の中の2つの折れ線は、自己評価の結果が Lesson 全体全部◎である割合と、自己評価の結果が Lesson 中1つでも△がある割合の推移状況を表している。全部◎の場合、児童の達成感や成就是大きく、逆に△がある場合は、不安感や不満感を感じている。

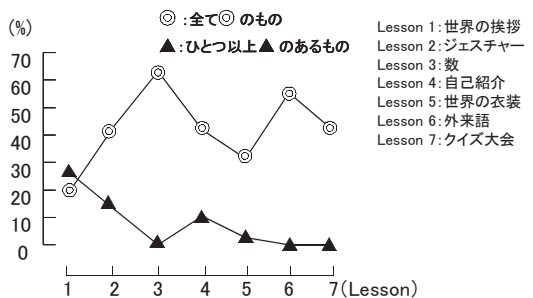


図4「Lesson別の自己評価の推移」

Lesson 1 から Lesson 3 までは評価が上昇傾向である。それに伴って不安感が減少し、達成感をもち始めていることが分かる。しかし、この図では、話すことの苦手な児童にとって「Show&Tell」の出でくる Lesson 4 から Lesson 5 にかけて、達成感が減少していることも判明した。単元の内容により、評価の推移を時系列で追っていくのは困難な部分もあるが、コミュニケーション能力の素地は長期間の学習が必要とされることから、今回はグラフ内での自己評価の推移に注目して考察を行った。国語科の学習との関連で、「外来語」の学習である Lesson 6 では、再び自己評価が上昇している。しかし、「外国語の音声や表現」には効果が薄く、自己効力感をあまり感じていない。

9月と1月の2回、児童の意識変容を比較調査した。複数の調査項目の中から、特徴的な結果が見られた部分について掲載する。

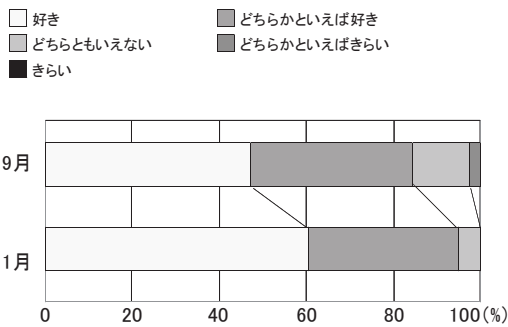


図5 「外国語活動(英語活動)の授業は好きですか」

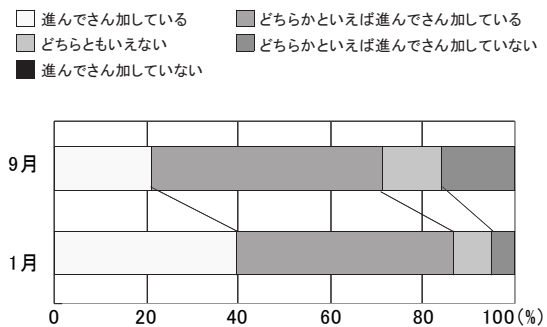


図6 「外国語活動(英語活動)の授業に進んでさん加していますか」

図5から、外国語活動の授業全体については「好き」「どちらかといえば好き」の割合が増え、全体的には学習に対する「関心・意欲・態度」である一定の成果が表れていることが分かる。図6の授業に進んで参加しているという点に関しても同様で、「進んでさん加している」「どちらかと言えば進んでさん加している」の割合が増え、「積極的に話すこと」が解消された傾向にある様子が伺える。個別の意識の推移はふり返りカードを使って追跡しているが、学習当初に積極的でないと判断された児童数名は、その状態が継続されている。

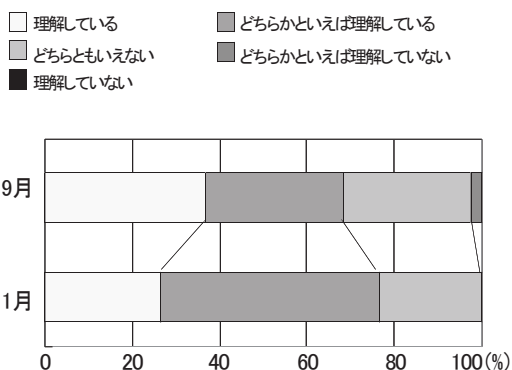


図7 「外国語活動(英語活動)の授業の内容をどれくらい理解していると思いますか」

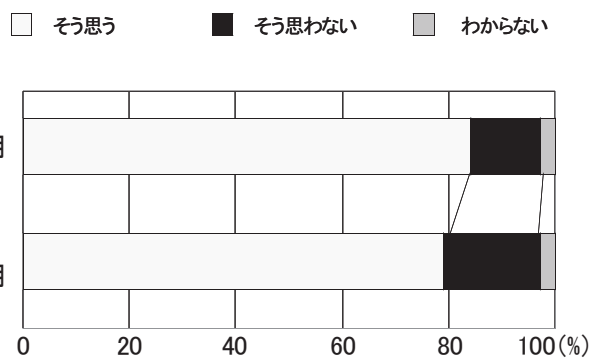


図8 「あなたは、英語を使えるようになりたいですか」

図7で、「英語は簡単」と考えていた5月当初と類似の結果が、9月の「外国語の授業の内容をどれくらい理解していると思いますか」の結果にも反映されている。しかし、学習を続けた結果の1月の結果では、それまでの「理解している」の割合が減少し、その代わりに「どちらかといえば理解している」の割合が高くなっている。ふり返りカードの結果に照ら

し合わせると、単元によっては理解に困難な部分も出てきていて、達成感が十分にもてないケースも表れていた。特に「知識・理解、技能・表現」に相当する、「音声や基本的な表現に関する事項」の自己評価に△印が多く見られ、コミュニケーション能力の素地育成をめざす外国語学習の中では、基本的な表現に関する指導比重が弱く、児童は達成感をもって学習に取り組みたいと考えているが、助言も指導比重が弱い方向を辿り、今回の実践においては、「音声や基本的な表現」にあまり効果的に働かなかったことが分かった。

図8で、「英語を使えるようになりたいですか」の項目については、「そう思う」の割合が減り、「そう思わない」の割合が増えている。楽しく学習に参加し、理解度も増しているのに何故このような結果になったのかということで、追ってインタビューしたところ、「他の国の言葉も大切」「日本語が使えるからいい」といった意見が出された。「英語ノート」の名称ではあるが、頻度は低いものの他言語を扱っていることや、数ある言語の中で英語の重要性を児童なりに受け止めた結果が、ここに反映されていると言える。

図9で、「外国の人が英語で話しかけてきたらどうすると思いますか」の項目では、「日本語で受け答えをする」「英語で受け答えをする」という両者の割合が、共に減少している。一方で、「ジェスチャーを使って受け答えをする」の割合が伸びている。これはふり返しカードの自己評価の推移をみた表からも分かる通り、ジェスチャーの効果を児童が非常に有益と捉えて学習し、ALT との実際のやりとりの中でも効果的と経験的に判断したものと言える。バーバルな面に加え、ノンバーバルな部分もコミュニケーションには大切と、授業を通して児童は体験活動から実感している。

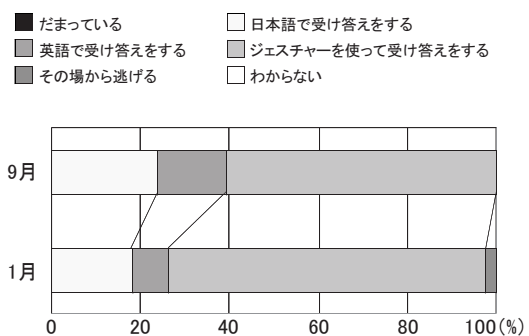


図9「もし、あなたに外国の人が英語で話しかけてきたら、あなたはどうすると思いますか」

この調査項目の中で、9月には見られなかった「その場から逃げる」という選択肢が、1月には選択されている。無記名で行っている調査であるため、人物の特定はできないが、コミュニケーションから遠ざかる選択をしている児童がいることが分かった。自己防衛もコミュニケーションの一形態ではあるが、積極的に関わっていける児童を育てたいと願って教育活動は行われている。コミュニケーションの手段が身につけていないと、自信をもって外国の人などに関わっていけない現実もこの結果から明らかになった。

3-3 ふり返しカードの結果から

「言葉や文化についての理解」という点では◎が圧倒的に多く、中には花丸をつけている児童も数名見られる。「積極的にコミュニケーションを図る」の部分も、◎の評価が多く見られる。一方、「外国語の音声や表現に親しむ」の評価部分で困難を感じている。「慣れる」「親しむ」をベースにした学習中心のためスキル指導を特別しておらず、そのため「外国語の音声や表現を知りたいけれど分からない」「分からないから不安」という児童が見られた。

コミュニケーション能力の素地を養うために「コミュニケーションへの意欲」「コミュニケーションへの挑戦」「コミュニケーションへの自信」を3要素として考えているが、高学年の発達段階と合わせて考えると、意欲と挑戦を持続出来ない場合は「関心・意欲・態度」がマイナス傾向を表すということが判明した。「使えた」「通じた」という成功体験を数多くし、自信をもってコミュニケーションに臨み、達成感を味わわせるためには、ある程度の指導事項も学習過程の中に位置づけて行わなければ達成感を味わうことができないのではないか。「外国語の音声や表現に親しむ」の評価観点が授業の中心になっている場合は、知識・

理解の定着を自然な展開の中で行い、達成感を味わわせる手だてを工夫することが大切と考える。

ふり返りカードへの記入状況から、比較的自分に甘い評価者、とても自分に厳しい評価者という二分化の実態も見られた。多くの児童は活動全体を通して緩やかな上昇曲線を描く評価を行っていたが、喜怒哀楽の激しい児童や、失敗感を強く抱く児童は、その日の出来具合により、◎から△というような極端な評価もしていることが分かった。また、教科学習での自己評価、日常生活上での自己評価と類似の評価となっていた実態も改めて判明した。

3—4 総合考察

実践研究から導き出された結果と総合考察を、変容と限界の視点から3点挙げる。

第一に、ふり返りカードを使って自己評価の力が高まったことが挙げられる。それは、

- ①ふり返りの内容に、気づきや広がり、深まりなどが見えてきたこと
- ②学習活動に対して、自分なりの意見や自分への評価をもち始めたこと
- ③ふり返ることで、次の学習への方向性が見えてきたこと
- ④学習者である自分自身への気づきが生まれ、深まったこと

の4点である。

さらに、ふり返りの際の客観性が育成されてきた。問題解決(タスク)的な学習活動を他者との関わりの中でふり返ることができた場合、学習の客観性は増している。相互関係性を踏まえたふり返りを行い、教師からの助言が児童との間で交わされた場合、「言語や文化についての体験的な理解」は児童相互間でなされ、さらに教師と児童のコミュニケーションとしても有機的になされたと言える。今回分析した自己評価で効果が薄かった「外国語の音声や表現」、つまり「知識・理解」の観点でも、学習の到達を客観的に捉えた自己評価をしている児童は、言語の認知能力が育っていると考えられる。

第二に、ふり返りカードを継続使用した形成的評価は、学習に対しての情意面には効果的であることが判明した。学習をふり返るということは、児童自身が自己を対象化するために、自己の学習活動をふり返るメタ認知の視点がなければならない。一過性の感想や自己評価は、学習の定着及び発展に向かう状況ではなかったと言える。より高次元の学習に向けて、自己の学習を対象化する視点のもたせかた、所謂ふり返りの観点を生かしたふり返りの視点を学ばせる必要があると考える。また、論理的思考を必要とするものに関しては、知的好奇心を働かせて意欲的に学習する傾向があることが分かった。自己評価としては、◎を残していない学習でも、記述内容を見ると達成感を感じている感想を残している。また、難易度の高い学習ということでは、「Show & Tell」も高学年の知的好奇心を満足させる学習活動であることが分かった。自己評価としてはすべての児童が◎になっているわけではない「Show & Tell」ではあるが、ペア活動やグループ活動での学習、スモールステップを交えた段階的な学習の工夫が少しずつコミュニケーションへの自信につながっている。助言をフィードバックすることで、児童の学習に対する不安が少しずつ取り除かれ、困難な学習にでも少しずつ取り組み始め、学習の情意面では内発的動機を高めたということが判明した。「意欲・関心・態度」という点での助言を与えることで、児童は安心して未知の学習にも気負わずに取り組むことができるようになってきた。「使えた」「通じた」という成功体験を数多くし、自信をもってコミュニケーションに臨ませることが最も大切な指導である。「知りたい」「学びたい」意欲を大切にしながら実践を積んでいきたい。

第三に、プラス面での変容だけではなく、今回の実践での限界も明らかになった。「言語や文化についての体験的な理解」「積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度」に関しては、学習を進める毎に自己評価のポイントはプラス方向に推移していたが、「外国

語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ」という点に関しては、活動の出来の善し悪しや達成感がふり返りのマイナス評価の不安ポイントとなって表れていた。学習内容は全部理解したいと思う一方で、逆にうまく理解できない場合、「関心・意欲・態度」の面でもマイナス評価を生み出すことが判明した。音声の認識に苦手意識が出始め、発音練習のためのリピートなどでは、恥ずかしさや友達との比較から、自己評価のポイントが下がっている児童もいる。スキル中心にならないという学習の方向から、教師側からの助言が「知識・理解、技能・表現」面でバランス的に弱くなっていたことも判明した。具体的な教授活動を取り入れ、児童の反応を捉えながら、課題解決の方向を今後一層探っていかなければならない。

4 まとめと今後の課題

本研究は、コミュニケーション能力の素地を育てることをめざしての外国語活動における形成的評価の活用を設定し、それによっての児童の変容を提出した。評価は目標に対応して行われる行為であることを基本的な考え方として、特に形成的評価が、児童の情意面や積極的なコミュニケーション活動に効果を発揮するという検証を行ってきた。しかし、「外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ」の「知識・理解」は、学習指導要領対応の指導資料準拠の実践にあっては、「知りたい」「学びたい」意欲を完全に救うことができず、達成感のもてない児童の自己評価や、不安感・不満感を解消できない自己評価という事態も招いた。ふり返りカードの自己評価の分析からは、認知面では不安感を解消しきれない結果が課題として残った。定着を求めないスタンスが、分からないことの蓄積という結果を招き、今回の研究内では、形成的評価が効率よく働かなかった部分もあるということが明らかになった。外国語の音声の認知や、リピート練習等の実際の認知活動に対しては、教授活動を見直さなければならない現状も見えてきた。情意面では肯定的、認知面では否定的な結果の出た今回の研究の方向を見直す必要がある。ここから、外国語活動の目標、位置づけ、シラバスやカリキュラムの問題と合わせ、形成的評価の在り方を再度考え直さなければならないと考える。

今回の研究は担当学級 38 名の変容を追ったものであり、一般化するには母数がまだ少なく、一実践例としての研究に留まっている。そのため、本学級での実践に関しては有効な部分があるものの、一般的な高学年対象の指導に関しては有益かどうか不明な部分が残った。形成的評価の可能性を探り、指導に生かすため、今後は学年全体 115 名のデータを具に調査するなどの研究を行い、指導法の一般化に向けてさらに研究を重ねていきたい。

註

- (1) 文部科学省編 「小学校外国語活動研修ガイドブック」 2009年 p.8
- (2) 国語教育研究所編 「国語教育研究大辞典」普及版 1991年 明治出版 p.238

参考文献

- 1) 文部科学省 「小学校学習指導要領解説 外国語活動編」 2008年 東洋館出版
- 2) 文部科学省 「英語ノート1」「英語ノート2」 2009年 教育出版株式会社
- 3) 文部科学省 「英語ノート1 指導資料」「英語ノート2 指導資料」 2009年
- 4) 文部科学省 「小学校外国語活動研修ガイドブック」 2009年
- 5) 「英語ノート」実践研究会、菅正隆（協力） 「小学校学習指導要領ポイントと学習活動の展開 外国語活動」 2009年 東洋館出版
- 6) 松川禮子、大城賢 「小学校外国語活動実践マニュアル」 2008年 旺文社
- 7) 北俊夫 「子どもを伸ばす基礎・基本の評価」 2002年 文溪堂
- 8) 北俊夫 「学校新時代の学力と評価」 2003年 文溪堂

【参考資料1 外国語活動指導案】

1 単元名 クイズ大会をしよう (英語ノート1 LESSON 7)

2 単元の目標

- (1) 英語にも日本語の二字熟語と同じような言葉があることを知る。
- (2) 積極的に相手にこれは何かと質問したり、答えたりする。
- (3) 英語を使って、クイズ大会をする。

3 単元計画 (4時間)

第1時	第2時(本時)	第3時	第4時
Activity ○の中は何か考えよう	Let's Chant ♪ What's this? ♪		
Activity 1 この漢字は何か考えよう	Activity 2 ブラック・ボックス・クイズ	Let's Play シルエット・クイズ	Activity クイズを作って聞いてみよう
Let's Chant ♪ What's this? ♪	Let's Play シルエット・クイズ	Activity クイズを作って聞いてみよう	う

4 単元について[教材・教具を含む]

使用教材・教具：英語ノート1、電子黒板、絵カード、漢字カード、ブラック・ボックス、教室の中にある物、シルエット絵カード

【本単元の内容】

1 主としてコミュニケーションに関すること

- ・オリジナルのクイズを出し合う中で、コミュニケーションを図る楽しさを体験すること。
- ・積極的にクイズを出したり、答えたりすること。
- ・クイズやその答えをはっきり言うなど、言葉ではっきり伝える大切さを知ること。

2 主として言語や文化に関すること

- ・クイズを出したり、答えたりしながら英語の音声やリズムに慣れ親しむこと。
- ・日本語との違いを知り、言葉の面白さに気付くこと。
- ・ALT とクイズを作ったり、クイズ大会を体験する中で文化に対する理解を深めること。

○話 題：クイズ大会

○場 面：事実を尋ねる

○表 現：What's this? It's a pencil.

○主な語彙：pencil, pencil case, ruler, eraser, glue, book, butterfly, starfish, lobster, jellyfish, octopus, yacht, this, it

○国際理解：日本語には二字熟語のような2つの漢字の組み合わせで意味を表す言葉があるのと同様、英語にも単語が組み合わせられてできている言葉があることを知り、言葉の多様性を実感する。

本単元では、What's this?を自然な形で使う場面として「シルエット・クイズ」や「ブラックボックス・クイズ」などのクイズを出し合う活動を取り上げた。これらのクイズは、視覚や触覚などの情報がヒントとなるため、児童は「What's this?」と言うだけでよく、抵抗は少ない。

第4時では、グループで考えたクイズを出題し合うクイズ大会を行わせる。グループで1つのまとまった活動を行うのは本単元が初めてである。互いに教え合い、「英語を使ったクイズができた」とひとりひとりの児童が感じられるようにしたい。活動においては、学級全体での活動、グループ活動、ペア活動、個人の活動と、各種の学習形態がある。

また、「海月」や「海星」などの二字熟語を取り上げ、それらは何を表しているか考えるク

イズをする。水族館の様子絵を使って、jellyfish や starfish を導入した後で、再度同じ英語を出させるための工夫として漢字を用いることで、児童の知的好奇心を高め、併せて言葉の面白さにも気付かせたい。

5 本時の目標

What's this?という質問を理解し、答える。

6 本時の展開

過程(分)	児童の活動	学級担任の活動	ALT の活動	●指導上の留意点 ◎評価の観点(方法) ◆国際理解の視点	教材
挨拶(5)	・挨拶をする。 Hello, I'm fine/happy/ hungry/sleepy.	・全体に挨拶をする。指導者2人で児童を分担して1人ひとりの児童と挨拶をする。 Hello, how are you?		●1人ひとり英語でやり取りをする機会をもたせるようにする。	
復習(10)	【Let's Chant】 ・チャンツを言う。	・絵カードや、実物の一部を見せ、それが何かを尋ねる。 What's this? A dog? No, it's not a dog. Do you need another hint? OK. What is it? A cat? Yes, it's a cat. Very good. ・絵カードを見せながら、チャンツを紹介し、ともにリズムに合わせて言う。		●前時に学習したことを思い出させる。 ●Another hint, please? Up/Down/Right/Left, please、などの発話を引き出すようにする。	絵カード(既習単語の)
展開(15)	【Activity 2】 ・ブラック・ボックスの中に手を入れて中に何が入っているかを予想して答える。 ・見ている児童は、前に出ている児童に、What's this?と言う。前の児童は予想して答える。	・クイズをすることを告げる。 Let's play Black Box Quiz. ☆グループ活動を提案☆ Eraser. Now it's your turn. Who wants to go next?	Look. This is a Black Box. Here is a hole. You can see inside the box. I will put this inside. ～sensei, put your hand into the box. You will touch something inside. Guess what it is. That's right. It's an eraser.	●児童がなかなか答えられない場合には、見ている児童たちに、Small? Big? What color?などとヒントを促す。 ◎前にいる児童に質問したり、ブラック・ボックスの中の物を予想して答えたりしようとする。 (行動観察)	箱 教室の中にある物など
展開(10)	【Let's Play】 ・シルエットを見て、それが何かを推測する。 rabbit, yacht, bird, butterfly	・シルエット絵カードを見せ、それが何かを尋ねる。 What's this? This is not an eraser. That's right. It's ~.		●Very good. Fantastic. Wonderful.などと心から励ましたり、ほめたりすることにより、児童の答えようとする意欲を高めるようにする。	英語ノート シルエット絵カード
挨拶(5)	・振り返りをする。 ・挨拶をする。 Good-bye. See you.	・児童の英語を使おうとする態度面についてよかったところを言う。 ・挨拶をする。 Good-bye. See you.	・児童の英語についてよかったところを言う。 ・挨拶をする。 Good-bye. See you.	●次時への意欲につながるように、具体的に児童のよかった点を評価する。	

7 児童座席表

【評価の観点】◎ 前にいる児童に質問したり、ブラック・ボックスの中の物を予想して答えたりしようとする。(行動観察)

[team] [team] [team] [team] [team] [team] [team] [team]

A	B	C	D	E	F	G	H
I	J	K	L	M	N	O	P
Q	R	S	T	U	V	W	X

☆言語や文化についての体験的な理解 ☆積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度 ☆音声や表現への慣れ親しみ

【参考資料2 授業における形成的評価の実践例】

Lesson 毎の振り返りカードに対し、児童の感想→教師の助言やコメント→授業、と形成的評価を繰り返し行っていった実際の中から、特徴的なものを挙げる。特に、外国語の

音声、基本的な表現への慣れ親しみへのコメントが多いため、その中から典型的なものを挙げる。

【Lesson1 世界の挨拶】★音

児	単語は知っていたけれど、塾と違ってどう使えばいいかわからない。文にしたいけれどならない。もどかしくて疲れた。
教	始まったばかりだからわからないことも多いでしょう。よくわからなくて疲れたという人も結構いましたよ。あまりあせらず聞くことからやってみようね。単語を知っているとというのはすごいことだから自信をもって。大丈夫だよ。
授	classroom English の使用頻度を控え、活動は ALT と模擬を提示するように努め、励ましと賞賛の声かけを多くすることにより、不安感を取り除くようにした。

【Lesson2 ジェスチャー】☆音

児	ただ「ハングリー」と言ってもあまりよく伝わらないことが分かった。ジェスチャーをつけて伝えると完璧。英語がとて楽しくなってきた。
教	今日のジェスチャーはとて分かりやすくよく伝わっていましたよ。いつもより声も聞こえていたし、友達とも笑顔でクイズに取り組んでいましたね。これからも言葉とジェスチャーを上手に組み合わせて伝え合っていこう。
授	外国語で伝え合うとき、ジェスチャーが効果的であるということを一過性のこととして捉えるのではなく、活用していく方向を促した。とても効果的であった。

【Lesson3 数】☆音

児	蛇と梯子のゲームが楽しい。ゲームの中の「ハウメニ」の意味も分かった。ゲームの中で数を英語で言うのが早くうまくできるようになった。
教	何度も楽しそうにゲームをしていて、見ている先生も楽しい気持ちになったよ。「ハウメニ」がどんなときに使えるか分かることもっと楽しさが広がると思うよ。
授	授業時間いっぱい真剣に取り組む姿が増えてきた。休み時間にも歌ったり、ゲームしたりしている。チャンツや歌も恥ずかしがらずに行う児童が増えてきた。

【Lesson4 自己紹介】☆コ

児	いつもあまり話さない男子とも沢山話すことができてよかった。男子のことが今までより分かってきた。少し恥ずかしかったけれど勇気を出してよかった。
教	自分のことを話すのを苦手と感じている人は結構いるようだから、特別なことだと思わない方がいいでしょう。日本語でも難しいことに挑戦して偉かったよ。難しいことだからこそ、ちゃんとできたらすごく楽しいって思うな。
授	励まし、賞賛することでコミュニケーションへの自信をもたせるよう配慮した。言い回しの難しい部分では、十分な達成感を抱けないまま過ごしている児童もいる。数を扱った前単元に比べると学習内容も難しくなってきた。

【Lesson5 世界の衣装】☆音

児	「アイライク」と「アイドットライク」の違いが分かって◎。積極的に手を挙げて発表できるようになってきた。いろんなことが分かってとても楽しかった。
教	何度も話す機会があったから、苦手な部分も自然にクリアできたのかもしれないね。話すことを苦手と感じている人が多いけれど随分積極的になってきたよ。
授	学級の特長である「積極的に話すことが苦手」という印象が薄くなってきた。学習内容にも関わっているが、進んで話す児童が増えてきた。買い物の疑似体験では、外国に行ったことを予想して「大丈夫」と自信をもっている。

【Lesson6 外来語】☆音

児	電子黒板でそれぞれ「オリジナルフルーツパフェ」を言いながら作ったのがすごく楽しかった。超豪華版のパフェができて、本当に作ってみたいくなりました。ぼくのも、みんなのパフェもすごく、みんな得意そうだった。
教	自分でパフェの内容を考えて、電子黒板で作りながら発表するというのがとても上手でおどろいたよ。発表もうまかったけれど、聞いている友達もしっかり聞いていて、「すごい」と言っていたね。英語も電子黒板ももうばっちり。
授	電子黒板での学習の楽しさに加え、国語科での学習内容とうまくリンクしていて、達成感をもって授業に参加している児童が多い。外来語としての音声と英語の音声の違いに驚き、新たな学習材料としての価値を見いだしている。

【Lesson7 クイズ大会】☆言

児	普段「シューズ」と使っている靴は、片方だと「シュー」ということが分かった。2 つ以上だと「ズ」になるらしい。「ひとで」は見た目と言葉が同じでびっくり。英語で、海の生き物についてもっと知りたいです。
教	すごくいい耳ですね。落ち着いてしっかり聞いていたから細かいことも分かったんだね。英語と日本語の違うところ、似ているところもちゃんとわかってえらいよ。クイズ大会ではヒントを考えるのが楽しいからがんばってね。
授	単元は児童の興味関心を引く仕掛けが沢山あり、実際の授業も随分活気のあるものであった。複数形の言い回しも耳から情報を得ている。新型インフルエンザ蔓延のため欠席者が後を絶たず、休んだ分の補充がままならないため授業に自信をもって臨めない児童の割合がとて高くなった。欠席が大きな不安感を引き起こしている。補充必要

注) 児＝児童の感想 教＝教師のコメント 授＝授業 ☆＝成果 ★＝課題
 言＝言語や文化についての体験的な理解 コ＝積極的にコミュニケーションを
 図ろうとする態度 音＝外国語の音声や基本的な表現への慣れ親しみ